

二〇一九年度

和歌山信愛高等学校

入学試験

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 この問題冊子は、1ページから27ページまであります。
開始のチャイムが鳴ったら、確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に記入しなさい。
- 三 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 四 終了のチャイムが鳴ったら、問題冊子の上に、解答用紙を
開いたまま裏返して置きなさい。

〈解答は、句読点や記号も一文字分と数えて記入すること〉

受験番号

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アフリカの赤道直下、ヴィルンガ火山群の山地林でマウンテンゴリラの視察を始めて間もないころのことだ。私がゴリラから数メートルのキョリを置いて観察していると、近くを通りかかったシリールという若いオスのゴリラがちらつと私のほうを見て近寄ってきた。これはまずい、と私は思った。

それまで野生ニホンザルの調査をしてきた私は、サルに近づかれたらサルのルールに従って行動せよ、という鉄則を守ってきた。ニホンザルの社会では、相手を見つめるのは強いサルの特権である。弱いサルは強いサルに見つめられたら、決して見返してはいけない。目を合わすと挑戦したと受け取られ、強いサルから攻撃されることになるからだ。目をそらすか、歯をむき出して笑ったような表情を浮かべ、自分が逆らうつもりがないことを表明しなければならぬ。だいたいニホンザルが近づいてくるといふのは、私の周りにサルの関心を引くものがあるからだし、そのサルは自分のほうが私より強いと感じているはずなので、刺激しないようにそつと目を伏せておくほうが無難である。

I、ゴリラのシリールが近づいてきたときも、^①私はシリールのほうを見ないように目を伏せた。ところが、シリールは一メートル前で止まって、じつと私の顔をのぞきこんだのである。若いオスとはいえ、一〇〇キログラムを優に越える体である。グロブのような手をしているし、長くてスルドい犬歯が光る。つかまれて咬まれてもしたら、ジュウショウを負いかねない。私は逆らうつもりがないことを示すため、さらに横を向いた。すると、シリールは私が向けたほうへと顔を寄せ、さらに私の顔を正面からじつと見つめたのである。顔と顔との間はわずか二〇センチほどしかない。私は恐怖に駆られて目を伏せてじつとしていた。意外なことに、シリールはしばらく私の顔をのぞきこむと、低い声でうなり、二、三步遠ざかると、ぼこぼこぼここと両手で力強く胸を打っては足早に遠ざかって行ったのである。

しばし呆然とシリールを見送った私は、ひよつとしたら^②シリールの行動を私が誤解したのではないかと思った。ニホンザルと同じ

ことだと思っていたが、ゴリラが顔をのぞきこむのは違う意味があるのかもしれない。そこで、私はゴリラ同士の行動をもっと注意深く観察してみることにした。

Ⅱ、これまでただ近くに寄るだけで何もしていないと思っていた行動が、実は重要な機能を果たしていることに気づいた。ゴリラ同士が近づきあつて顔を合わす。

Ⅲ、ニホンザルやチンパンジーのように体に触れることもないし、抱き合ったり、相手に馬乗りになったりすることもないので、私は何か意味のある交渉をしたとは見なしてこなかった。ところが、それは、挨拶、遊びの誘い、求愛、仲直り、けんかの仲裁などに用いられていたのである。顔を合わせても、どちらかがニホンザルのような歯をむき出す笑いを浮かべることがもない。どちらも無表情のまま、一分近くも間近でじつと顔を合わせるのだ。何とも不思議で静かな社会交渉に見えた。

そのうち、私はこれがゴリラの社会性を表す典型的な構えであることに気づいた。ニホンザルは自分と相手のどちらが強いかを常に認識し、確かめながら暮らしている。群れで仲間といっしょに移動すれば、食物や休み場所、交尾の相手をめぐって仲間と競合が生じる。それを防ぐために、あらかじめ優劣関係を作り、弱い立場のサルが自分の行動を抑制するように調節しているのだ。ところが、ゴリラはニホンザルのような優劣関係を認識していない。ゴリラのオスはメスの二倍近い体重を持つ。子どものゴリラの一〇倍以上もある。でも、どんなに体の差があつても、小さいゴリラは劣位な態度を取らない。体の大きなゴリラが近づいてきて顔をのぞきこんでも、視線をそらすことAなく、相手の顔をじつと見返す。自分が食べようとしていた食物を横取りされBたら、ゴツゴツと不満の声を出す。決して負けていないのである。

私が驚いたのは、背中Dの白い大きなオス同士が近づきあつてけんかが起Eこりそうになったとき、まだ若いシリーがするすつとオスたちの間に割り込んでけんかを止めたことだ。このときも、シリーは二頭のオスにかわるがわる近づいてその顔をのぞきこみ、互いを遠ざけることに成功した。ニホンザルでは決してこのような仲裁は起こりえない。体の小さなサルが大きなサル同士のけんかに介入したら、すぐさま攻撃さFれて仲裁どころではなくなってしまうからだ。ゴリラでそれが可能なのは、体の大きさに応じて優劣が決まっていなCいことと、勝敗をつけることがトラブルの解決とされていCないからである。ぶつかり合おうとしたオ

私たちはどちらも負けようとは思っていない。だから実際に組み合わせば、どちらもけがなしには終わらない。誰かが割って入ってくれば、けんかをせずにもどちらもメンツを失わずに引き分けることができる。そこで、自分たちより体の小さい仲裁者に従うのである。

IV、群れ生活に平和とチツジヨ^dをもたらしルールがニホンザルとゴリラでは違うのだ。ニホンザルは互いに優劣を認知し、勝ち負けをすぐに決めてトラブルを防ぐ。ゴリラは勝ち負けを決めずに、第三者が仲裁に入ることによって対等性を維持する。メンツを保つためには、仲裁者は小さい方がいい。もし大きなゴリラが仲裁に入ったら、力づくで止められたということになり、メンツが保てなくなるからだ。相手をのぞきこむ行動も、こういったゴリラの対等性を維持するために発達したに違いない。

こうした^③ニホンザルとゴリラの社会性を人間と比べてみると、人間はニホンザルではなく、ゴリラに近い社会性を持っているように見える。子どものころから人間は負けず嫌いだし、トラブルを勝ち負けで解決するのではなく、第三者が仲裁して互いのメンツを保とうとする傾向が強いからだ。しかし、人間はゴリラほど徹底的に対等性にこだわるわけではない。相手に勝ちたい、仲間より優位に立ちたいという気持ちも持っている。

ただ、そこには^eシンチョウ^eな気配りが働いている。勝つことによって、実は自分が不利な状況に置かれることが多いからである。ニホンザルのように、勝つことは相手を屈服させ、抑圧し、押しつけることを意味する。勝者と敗者は対等ではなく、勝者が利益を独り占めにする。だから、勝っても勝者は敗者と友達にはなれない。でも、負けないでいようとすることは相手と対等な立場が目標なので、相手を屈服させたり押しつけたりにならない。友達を失わないし、かえって仲良くなれるかもしれない。常にとトラブルが起こる危険が生じる。そのため、間を取り持ってくれる別の仲間が必要なのである。人間はこういったことにいつも最大限の注意を払いながら暮らしている。勝ちたいけれど友達は失いたくないから、勝利を誇らず、しきりに敗者に気配りをする。ニホンザルのように、利益を独占せず、みんなに気前よく分配する。ゴリラのように、自分より弱い仲裁者であっても言うことを聞いてメンツを保つ。人間は互いに対等であることに常に気を配りながら社会を作ってきたように思える。

しかし、現代の社会は効率性を重視するあまり、勝敗をつけることでトラブルを解決する傾向を強めているように見える。それは、④「負けまいとする態度」を「勝とうとする気持ち」に読み替えることによって加速している。ゴリラとニホンザルのように、この二つははつきり違う社会を作り出す。それを混同して同じものと見なすことによつて、日本は競争社会を乗り切ろうとしている。

そんな事態を深刻化させる前に防ぐには、もう一度人間の社会の由来を考え直してほしい。人間はニホンザルではなく、ゴリラと共通の祖先から対等性をより重んじる社会を受け継いできた。それは、互いに静かに向き合う交渉を持つことによつて保たれてきた。人間らしい社会を作る上で、顔と顔を合わせ、互いの温かい関係を確かめ合うことはとても重要なコミュニケーションなのである。IT技術は私たちに、遠い場所においても会話や情報交換ができる機会を与えてくれた。しかし、それは人間の対等な社会性を保持してくれる力を持っていない。人間が争わず、勝敗にこだわらず、対等で平等な関係を保つためには、≧ X ≧を設計することが不可欠なのである。それは、勝つ構えより、負けない構えの美しさを尊ぶ社会といつてもいいだろうと思う。

(山極 壽一「負けない構えの美しさをゴリラから学ぶ」より)

問一 線部 a ~ e のカタカナを漢字に直しなさい。(楷書ではつきりと書くこと。)

問二 本文中の I ~ IV に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使うことはできません。

ア でも イ だから ウ つまり エ また オ すると

問三 ———線部①「私はシリーのほうを見ないように目を伏せた」とありますが、筆者はなぜこのような行動をとったのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、マウンテンゴリラの視察を始めて間もないために、ゴリラに近づいてはいけないと知っていたものの近づきすぎてしまい、これはまずいと思ったから。

イ 筆者は、弱いサルは強いサルに見つめられたら決して見返さないというニホンザルの調査をした結果から、自分が敵ではないことを示す必要があると考えたから。

ウ 筆者は、ヴェルンガ火山群の山地林に生息するサルの関心を引いてその生態を調査しようとしたが、思いがけずゴリラが近寄ってきたため、恐怖を感じたから。

エ 筆者は、このままだと自分より強いゴリラに攻撃され生命の危険があるため、なんとかして逃げ出したいと考え込んでしまったから。

オ 筆者は、自分に挑戦的にふるまう若いサルにとまどい、サルの関心を引いてしまったものが何かわからず、刺激しないようにするしかなかったから。

問四 ——— 線部② 「シリーの行動を私が誤解したのではないか」とありますが、どのように誤解していたのですか。その説明を

した次の文の に当てはまる言葉を本文中から二十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

ゴリラであるシリーの顔を合わすという行動は、ニホンザルと違って の機能を
持っているのに、ニホンザルもゴリラも同じだと誤解していた。

問五 ——— 線部A～Fの単語の品詞の組み合わせとして正しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア	A	形容詞	B	動詞	C	接続詞	D	形容詞	E	名詞	F	助動詞
イ	A	助動詞	B	動詞	C	接続詞	D	連体詞	E	動詞	F	助詞
ウ	A	形容詞	B	助動詞	C	副詞	D	形容詞	E	動詞	F	助動詞
エ	A	助動詞	B	助詞	C	副詞	D	連体詞	E	名詞	F	助詞
オ	A	形容詞	B	助動詞	C	副詞	D	連体詞	E	動詞	F	助動詞

問六 ———線部③「ニホンザルとゴリラの社会性を人間と比べてみると、人間はニホンザルではなく、ゴリラに近い社会性を持つているように見える」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 筆者の考えている、ニホンザルの社会のあり方を説明した次の文の に当てはまる言葉を、本文中から三十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

(三十字以内)

という仕組みを持つ社会。

- (2) 筆者の考えている、ゴリラと人間の共通点を、本文中の言葉を使って五十字以内で説明しなさい。
- (3) 筆者の考えている、ゴリラと人間の相違点を、本文中の言葉を使って五十字以内で説明しなさい。

問七 —— 線部④ 『負けまいとする態度』を『勝とうとする気持ち』に読み替える」とありますが、これはどうすることです

か。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 負けてもいいという投げやりな気持ちでする行動では、社会に迷惑をかけることも多いので、結局は勝つということを一に考えてトラブルに向き合うようにすること。

イ 負けないようにする行動には、相手との駆け引きに最大限の注意を払う必要があるから、勝つという強い気持ちで勝負に出るようにすること。

ウ 負けたくないという気持ちでする行動には、勝負をやめたり引き分けたりすることも含まれるはずなのに、勝つということだけを求めて相手を屈服させる気持ちで対すること。

エ 負けることは社会で劣位な立場に置かれることになり、現代の社会では生きるための効率が悪いいため、勝とうとする気持ちで社会で優位に立てるようにすること。

オ 多分負けないだろうというような甘い見通しでする行動では、将来の競争社会を乗り切ることができないので、勝つために何ができるかということを常に考えるようにすること。

問八 本文中の ≪ X ≫ に当てはまる内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 互いの勝ちたいという競争心からのトラブルを、仲間が力づくで止める思いやりのある暮らし
- イ 互いにメンツを気にし、トラブルが起こったときは無邪気な子どもに仲裁を期待する人間関係
- ウ 遠くの人とも互いにコミュニケーションをとり、トラブルが起こらないよう心配りし合う社会
- エ 互いに顔を合わせる機会を多く持ち、トラブルに仲間が機敏に反応して仲裁するような暮らし
- オ 互いに自分の言い分を主張せず、トラブルになりそうな物事をできるだけ遠ざけようとする社会

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二人きりになった図書準備室。

ぱん、と軽い音がして、瑞穂^{みずほ}の目の前の机に、一枚の紙が置かれた。

「これ、※俳句甲子園のエントリーフォームのコピー」

机の向かい側に座ったトーコが、まだ何も記入されていないその紙をすべらせた。

「それで、瑞穂、折^ひり入^いつてのお願いがあるんだけど。このエントリーの締め切りが迫っている。定員五名、補欠登録もできるけどね」
「うん。知ってる」

瑞穂も、俳句甲子園のことは自分で調べているのだから。

「それに対して、私たち同好会の会員は六名でしょ」

「うん」

瑞穂は用心深く答えて、またエントリーフォームに目を落とす。トーコと視線を合わせなくてもすむように。

「それで、再確認なんだけど、俳句甲子園の大会規定を説明するね」

「あ、うん」

話はやっぱりこのことか。そろそろ出ると思ってたけど。

要領よく説明してくれるトーコの声にも a、瑞穂はあれこれ考える。

そう、俳句甲子園は、一チーム五名で参加する。

俳句同好会に入った時から、実際のメンバー編成はどうなるんだろうと不安だった。入会するまでわからなかったけれど、瑞穂が入った時、すでに五名の会員がいたのだ。

——私が入会したいって言わなければ、初期メンバーだけですんなりエントリーできていたんだ。余計者の瑞穂さえいなければ、自分を余計者とは考えないようにしてきた。瑞穂は、自分で言うのも何だが、国語の成績は学年でもトップクラスだ。国語の文学史の授業を受けている時にクラスメートの反応を窺う^{うかが}だけでも、自分の知識はすごいとわかる。うぬぼれではない。『^①枕草子』や『徒然草』どころか、『^②源氏物語』だって読んでいる。原文じゃなくて、現代語対訳のだけど。でも、漫画で読んで『源氏』をわかった気になってるクラスメートとは一緒にされたくない。俳句だって、一時期熱中していた。マイ[※]歳時記を持っている高校生なんて、すごく貴重だと思う。

——そうかな。

瑞穂の心の中でもう一人の瑞穂がそうささやく。

——^③あんたは協調性ないし、俳句経験者と言ったって、大したキャリアでもないじゃない。その証拠に、今日作った句だって、あんたより初心者の一年生のほうが高評価なくらいだった。

それはともかく、瑞穂みたいに知識のあるメンバーは貴重なはずだ。順当にいけば、二年生三人——瑞穂とトローコと、ここにはいない会長の茜^{あかね}——と、三人の一年生のうちの二人をエントリーメンバーにするのがいい。

だいたい、二年生をさし置いて一年生がメンバーに入るなんて、そんなの……。

——はずれた二年生のメンツが立たないって？ 情けない人間だね、瑞穂。

「……瑞穂？ 続きを話していい？」

「ん？ ああ、ごめんなさい、どうぞ」

自分一人の考えに夢中になっているうちにトローコの説明は終わっていたようだ。

「まだ締め切りには少し時間があるけど、そろそろ[※]スタメンは決定した方がいいかなって」
ほら来た。

どうしてここに、会長の茜がないんだろう。

——こういう話って、役つきの会員がそろって説得するものじゃないの？ 落とすメンバーには。

瑞穂の頭の中に、いろんな声が渦まく。

——でも、あんたが落ちるとはまだ決まってるじゃないじゃない。

「うちの一年生三人のことなんだけどね」

トココのきびきびした声で、瑞穂はまた現実に引き戻される。

「私たち、あの三人をA V D担当って勝手に呼んでるんだけど」

「A V D？」

「そう。『A』はオーディオ、つまり音声担当。三田村理香。声に出した時の言葉の響きにすごく敏感で、センスがあるでしょ」

「そうね」

たとえば今日の練習でも、歳時記をめくりながら、突然理香はこんなことを言い出した。

——ねえ、『神田川祭の中を流れけり』って、この句、すごく晴れ晴れしてますよね。それ、ア段の音がいっぱいあるからじゃないでしょうか。ほら、十七音のうち九音もア段。だからとってもおめでたい感じなんだと思います。

——わかったわかった、理香。わかったから、実作に戻ろう。

トココは軽くあしらったが、瑞穂には新鮮だった。音で俳句を楽しむなんて。

それを思い出しながら瑞穂は続けた。

「たしかに。それと、理香って声もすごく通って聞きやすい気がする」

「そうだね。あの子いい声してる。さすが、一人カラオケが趣味で、カラオケボックスにマイキーボードを持ち込んで弾き語りするのがストレス解消法って言うだけあるわ」

「ふうん」

理香とトローコはそんな話もできているのか。瑞穂は一度も一年生とプライベートな会話ができていないことに、今気づいた。そう言えば、この間ほかの会員がカラオケに行くと言っていたっけ。でも瑞穂はことわってしまったのだ。

「マイクの使い方もうまいしね。それがカラオケのおかげっていうのは笑っちゃうけど、大事な能力よね。俳句甲子園では互いに相手の句を鑑賞して発表するのにマイクを使うから、そこでもたまたましている学校はやっぱりパフォーマンス力が欠けると思われやすいもの」

瑞穂は無言でまたうなずいた。認めたくないが、今抱いてるこのネガティブな感情は、嫉妬だ。下級生相手に。④ 瑞穂の気も知らないトローコは、次の話を始めている。

「そして『V』はビジュアル担当北条真名。書道何段だったかな、とにかくそっちでも大会に出られるくらいの腕前で、視覚に訴える字面を選別できる」

「うん」

「それもよく知っている。」

真名は会員の句を毛筆で大きな紙に清書してくれる。それを遠くから見ると、たしかに印象が変わる句があるのだ。いつも自分のパソコンに句を作りためていた瑞穂には、これも新鮮な体験だった。

「そして最後の『D』はデイビット担当、桐生夏樹^{きりゆう}。論理を組み立てるのが得意で人の言葉尻にも敏感。悪く言えば

b

のが上手なだけなんだって本人は気にしてるけど」
「ううん、しゃべれるってことはそれだけで俳句甲子園には強いと思う。彼女、この間全校集会でクラス代表としてしゃべってたけど、たしかに全然あがってなかったし」

——俳句甲子園で勝利をおさめるにはどういう戦術がいいか。

新野先生が力説していたことだ。

——ポイントの第一は、鑑賞点をもぎとること。

トーコもあれを思い出していたらしい。

「新野先生が言っていた通りよね。鑑賞点がものを言う本番で、とにかく話し続けられる人間は強い」

瑞穂はじっとトーコの話聞いていた。トーコの言うとおりでと思うけど、それにしても。

——私たち、ね。

その中に瑞穂は含まれない。茜会長とトーコは二人だけで、もう全部決めていたわけだ。「そうだね、トーコ。私もそう思う」
⑤ **複雑な気持ち**を押し隠して、瑞穂は静かにうなずいた。たしかに、一年生三人は強い戦力だ。ここで、私はどうなるのよなんて見苦しくわめくのは、情けなすぎる。瑞穂にだってプライドがある。

「それと、やっぱりうちの主軸は会長の茜でしょ」

「うん」

これもそのとおりだ。須崎茜は、一見ふわふわしているが、俳句に関してはすぐシビアだし熱心だし、実際、王道の俳句を作り続ける。先生の言うポイントの第二、「七点の句」を。先週の練習試合でも、今日の俳句でもそうだった。

瑞穂にはそれができない。教科書通りの句を作るなんて、かえって恥ずかしいと思ってしまう。自分にしか作れない、すごくとんがって、人を驚かすような句でなきゃ、作る意味がないと思う。

なのに、評価されるのは、『骨法正しい』と言われる須崎茜の句の方だ。

でも、いい。俳句甲子園の場だって『骨法正しい』俳句は評価が高いんだから、須崎茜をはずすことはできない。

「これで四人。で、最後の一人なんだけど」

もういいよ、トーコ。

——こんなに丁寧に、外堀をじりじりと埋めるみたいにして、私がいかに要らない人間か説明してくれなくてもよかったよ。そんなこと、もう最初からわかってたから。

一年生三人の能力も、茜会長の才能も、いまさら確認してもらわなくてわかってた。そして、このトーコ。

俳句は初心者だと言うし、たしかに句はぱつとしないが、夏樹に負けなくらいしやべりは得意だし、頭の回転の速さは夏樹以上。対戦時間の短い俳句甲子園——鑑賞時間は一句につき、たった三分（決勝戦をのぞく）——で、一番鑑賞点獲得に貢献できるのはトーコに間違いない。

つまり。

——私、井野瑞穂はいらない人間だ。

別にこういう経験は初めてじゃない。自分がすごく得意なジャンルだ、みんなに認められてるって思っていたフィールドで、気がつけば誰にも相手にされない井の中の蛙かわずだったと思いき知らされるのは。

「……だから瑞穂、お願いね」

「え？」

しばらく、トーコの言葉の意味がわからなかった。

それから、目を丸くしてトーコを見る。

「トーコ、今何て？」

「瑞穂、五人目のメンバーになって。実際に試合での順番を決めるのはもう少しあと、実際に句がそろうまで延ばすけど。顧問の意見も聞かないといけないしね」

「ちよつと待って。じゃ、トーコは？」

瑞穂はまだトーコの提案に半信半疑だ。だが、トーコはあっさり答える。

「私は補欠に回る」

「どうして？」

「私は創作ができない人間なの」

「そんなことないよ、みんな初心者なのは一緒じゃない」

ちよつと⑥心にもない言い方かな。でも、全くの嘘うそでもない。瑞穂も自信をなくしかけているところだ。

トーコは不思議な笑い方をした。

⑦酷こだなあ、瑞穂」

「え？」

「瑞穂にはわからないか。世の中には、そういう才能がない人間もいるんだよ」

「俳句を作るのにそんな特別な才能なんて必要かなあ」

長編小説を書くわけではないのに。ところが、トーコの目がきびしくなった。

「できる人間にはわからないのかな。さかあがりができない人間は、自分がどうしてできないのか説明できないでしょ？ それと

同じだよ。音痴の人間にどうして音はずしちゃうのよって聞くのは酷じゃない？」

瑞穂が返事を探している間に、トーコはさっさと出て行ってしまった。

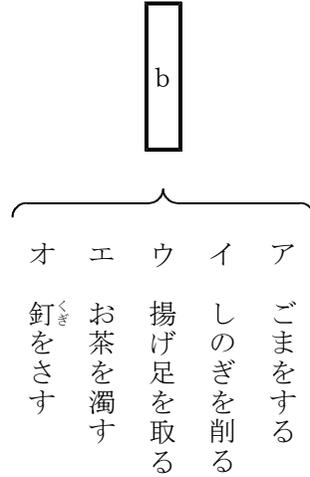
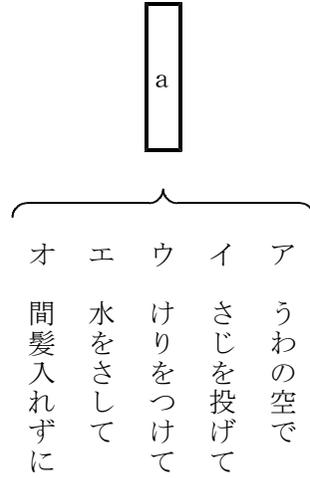
（森谷 明子『春や春』より）

注 ※ 俳句甲子園：愛媛県松山市で毎年八月に開催される俳句コンクール、全国高校俳句選手権大会のこと。

※ 歳時記：俳句の季語を集めて分類し、それぞれに解説と例句をほどこした書物。

※ スタメン：スターティング・メンバーの略。試合開始時の出場選手。

問一 本文中の a、b に当てはまる言葉として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。



問二 線部①「枕草子」、②「源氏物語」の作者をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 松尾芭蕉 イ 紫式部 ウ 吉田兼好 エ 紀貫之 オ 清少納言

問三 線部③「あなたは協調性ないし」とありますが、そのことを表すエピソードとして、この後の文章でどのようなことが挙げられていますか。四十字以内で答えなさい。

問四 —— 線部④ 「瑞穂の気も知らないトーコ」とありますが、このとき、「トーコ」はどのようなことに気づいていないのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が余計者であるということは十分わかっているのに、そのことを早く言ってほしいという瑞穂の気持ち。

イ 後輩たちの特性を把握しているトーコを目の前にして、それができない自分を恥ずかしく思っている瑞穂の気持ち。

ウ 国語の知識の豊富さには人一倍自信があるが、優れた能力を持つ一年生のことを快く思っていない瑞穂の気持ち。

エ 後輩たちが、先輩である自分をさし置いてトーコと親しくしているのを知り、腹立たしく思っている瑞穂の気持ち。

オ 俳句甲子園に出場するのは、人を驚かせるような創作ができる自分が誰よりもふさわしいと思っている瑞穂の気持ち。

問五 —— 線部⑤ 「複雑な気持ち」とありますが、このときの「瑞穂」の気持ちの説明として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 戦力となる一年生が揃っていることは頼もしいが、そのために自分が俳句甲子園の選手に選ばれないであろうことを悟り、心が落ち着かずにいる。

イ 新野先生が言うように、鑑賞点を獲得することが大切だということは理解できるが、骨法正しい王道の俳句を作ることには価値を見出せずにいる。

ウ 俳句に対する情熱は誰よりも強いと思っているが、いつも高い評価をもらえるのは茜なので、これまでに築いてきた自

信を失いそうになっている。

エ 夏樹が鑑賞点をもぎとるのに貢献できる人材であることにはうなずけるが、本番では緊張してうまく話せなくなるのではないかと心配している。

オ 一年生をよく観察しているトーコの洞察力には感心しているが、トーコと茜が自分の知らないところで出場選手を決めていたことに疎外感を抱いている。

カ 一年生がチームにとって欠かせない存在であるというトーコの話には共感できるが、自分のことはいっこうに評価してくれないので強い憤りを感じている。

問六 —— 線部⑥「心にもない言い方」とありますが、瑞穂の発言のどのようなところが「心にもない」のですか。その説明

として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア トーコが創作を苦手として知っていることを知っているのに、知らないふりをして補欠に回る理由を聞いたところ。

イ 自分は俳句に関して経験も知識もあると思っているのに、自分も含めて初心者であると言ったところ。

ウ 補欠に回るならトーコだろうと思っていたのに、自信のなさそうなトーコをわざとらしく励ましたところ。

エ 自分が選手に選ばれて嬉しいのに、トーコの方が選手としてふさわしいかのようにお世辞を言ったところ。

オ 自分が選手に選ばれるはずだと思っていたのに、その人選に納得がいかないような言い方をしたところ。

問七 ――線部⑦「酷だなあ、瑞穂」とありますが、このとき、「トーコ」はどのようなことを言おうとしていたと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一人ひとりの特性を考えて出場メンバーを選出したのに、才能の有無を軽視した瑞穂の発言は、自分のこれまでの苦労を台なしにしているということ。

イ トーコ自身はどう創作していいかわからず困っているのに、そんな自分にも出場資格があると瑞穂が言ってくれたことをありがたく感じているということ。

ウ 自分の出場が決まった嬉しさを瑞穂が隠しきれていないせいで、スタメンに入っていない自分の孤立感がいつそう強くなってしまうということ。

エ 瑞穂のように才能のある人はそうでない人の気持ちが変わらず、その場を取り繕うような励ましをしたところで、かえって相手を傷つけてしまうということ。

オ 創作の得意な瑞穂がアドバイスをするとするのは、創作する自信がないトーコにとって、見下されているような感じがして不快に感じるということ。

問八 〰〰〰線部「折り入ったのお願い」とありますが、「トーコ」は「瑞穂」にどのようなことをお願いしようとしていたのですか。答えなさい。

問九 この文章の構成や表現の特徴についての説明として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア テンポの良い会話を多用することで、俳句同好会の活動に熱中する高校生の日常生活を見事に描き、親しみやすい物語を作ること成功している。

イ この場面での登場人物は二人のみだが、回想を織り交ぜることで、この場にはいない他の部員たちの人物像が想像しやすいように工夫されている。

ウ 表面上は「トーコ」と会話しながらも、心中では自分に対して語りかける表現を用いることで、葛藤する「瑞穂」の様子を効果的に描写している。

エ 俳句同好会の内部で起こったささやかなエピソードを、「瑞穂」と「トーコ」の二人の視点を交錯させることで、奥行のあるものになっている。

オ 読み進めるうちに状況や事情が明らかになっていく形式がとられており、読者の興味や関心をかき立て、物語の中に引き込む効果を発揮している。

【三】 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

※董永は、いとけなき時に母にはなれ、家貧しくして、常に人に雇はれ農作をし、賃を取りて日を送りたり。父、さて、^①足も

立たぬさまにて、小車を作り、父を乗せて、^②田の畦に置いて養ひたり。ある時^A父におくれ、葬礼をととのへたく思へども、も

とより貧しければかなはず。されば、^aれうそく十貫に身を売り、葬礼を営む。さて、かの銭主のもとへ行きけるが、道にて一人

の^③美女に会へり。^B董永が妻にならんとて、ともに行きて、一月に[※]かとりの絹三百疋織りて、主の方へ返したれば、主も^④こ

れを感じて、董永が身を許したり。その後、董永に^b言ふやうは、「我は天上の織姫なるが、汝が孝を感じて、我を下して、負ひ目を償はせり」とて、天へぞ上がりける。

(『二十四孝』より)

注 ※ 董永：中国漢代の人物。

※ れうそく十貫：「れうそく」は金銭のこと。「貫」はお金の単位。

※ かとりの絹三百疋：「かとり」は目の詰まった硬い絹織物。「疋」は布の長さの単位。

問一 〜〜〜線部 a 「れうそく」、b 「言ふやう」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えなさい。

問二 〓線部 A 「父におくれ」、B 「董永が妻にならん」の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

A 「父におくれ」

- ア 父親に気後れして
- イ 父親に置き去りにされて
- ウ 父親に見送られて
- エ 父親に先立たれて
- オ 父親より劣っていて

B 「董永が妻にならん」

- ア 董永は妻ではない
- イ 董永は妻になりたい
- ウ 董永の妻である
- エ 董永の妻にはならない
- オ 董永の妻になろう

問三 ── 線部① 「足も立たぬさまにて」を現代語訳しなさい。

問四 ── 線部② 「田の畦に置いて」の主語はだれですか。本文中の言葉で答えなさい。

問五 ── 線部③ 「美女」と同じ人物を指す語を、本文中から二字で抜き出しなさい。

問六 ── 線部④ 「これを感じて」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 身売りするほど貧しい暮らしをする董永が美しい女と結婚したことに感心したということ。
- イ 董永たちが一ヶ月で絹織物を完成させ、自分のも手に持ってきたことに感心したということ。
- ウ 董永が絹織物を完成させることで妻としての役割を果たしたことに感心したということ。
- エ 身売りをしなければならぬほど貧しい董永と結婚してくれた女に感謝したということ。
- オ 一ヶ月で絹織物を完成させるほどまじめによく働く董永を育てた彼の父に感謝したということ。

【問題は次のページに続きます。】

問七 本文を学習した後、先生から比較資料として【資料Ⅰ】、【資料Ⅱ】が配布され、これらを用いてクラスで話し合いました。後の〈話し合った内容〉ア～オの中から内容に合致しないものを一つ選び、記号で答えなさい。

【資料Ⅰ】 鶴女房にようぼう

貧しい男が、けがをして地上に降りているツルを助けたことがあった。ある晩、美しい女が男の家に訪ねてきて、泊めてくれと言う。そのまま女は男の妻になり、反物を織るようになった。織られた布は高く売れる。しかし、反物を織るところを見てはならないという約束を破り、男が反物を織っている妻の部屋をのぞくと、ツルが体の羽を抜いて布を織っていた。妻は男が助けたツルだったのだ。男がのぞいたことに気づいたツルは、そのまま飛び去ってしまった。

【資料Ⅱ】 養老の滝

昔、貧しい男が年老いた父を養いながら暮らしていた。男は毎日必死に働いたものの、父親の好物であった酒を十分に買うことができずにいた。それでも男は父親が酒を飲むときの幸せそうな様子を思い浮かべると、なんとかしてあげたいと思っていた。

そんなある日、男が仕事をしていると、どこからともなく酒の香りが漂ってくる。不思議に思い辺りを見回すと、そこには見上げるばかりの滝がしぶきを立てて流れ落ちており、その水を飲んでみると、なんと酒の味がするのであった。男は「この酒は天からの授かり物だ、父にも飲ませよう」と思い、酒を汲んで帰り、父に飲ませた。

この話を聞いた人々は、「これは男の行いを天地の神がお褒めになったのだ」とうわさした。

〈話し合った内容〉

ア Aさん：本文は、【資料Ⅰ】に似ているね。美女がいきなり男のもとにやってきて妻になったり、その妻が反物を織ったあと、男のもとを去ってしまったりしているところが本文と共通しているよ。

イ Bさん：でも、【資料Ⅰ】の美女の正体は男に助けられたツルだったけれど、本文の女は董永に助けられたわけではないよね。

ウ Cさん：本文や【資料Ⅰ】、【資料Ⅱ】は、主人公を助けた銭主、ツルを助けた男、育ててくれた父親、それぞれに対する恩返しがテーマになっているんだよ。

エ Dさん：本文のテーマは恩返しなのかな。むしろ【資料Ⅱ】のように、親孝行をしたら天から報われた、という話だと思う。

オ Eさん：なるほど。天は【資料Ⅱ】の、父のために酒が欲しかった男に酒を与えたように、本文では父のために身売りをした主人公のもとに女を遣わしたんだね。

【問題はこれで終わりです。】

【一】
問一 a 距離
b 鋭
c 重傷
d 秩序
e 慎重

問二 I イ
II オ
III ア
IV ウ

問三
イ

問四 挨拶、遊び、の仲裁など
問五 オ

問六 (1) 互いに優劣、ブルを防ぐ

という仕組みを持つ社会。

(2) と第ト、す三ラ、る者ブ、傾がルを、向仲勝、が裁ち、あし負、るて互け、点。い、の解、対決、等性、る、をの、維で、持は、しな、よ、く、う、

(3) つはゴ、て相リ、い手ラ、るよは、とり徹、い優底、う位、的、点に、に、。立、対、ち、等、た、性、い、に、と、こ、い、だ、う、わ、気、る、持、が、ち、、も、人、持、間

問七 ウ
問八 エ

【二】
問一 a ア
b ウ
問二 ① オ
② イ

問三
きほ、にかの、瑞穂、会員、がが、こカラ、とオ、わケ、てに、し行、まくと、言、こつ、とて、い、た、と

問四 ウ
問五 ア
オ

問六 イ
問七 エ

問八 瑞穂に俳句甲子園のスタメンになってほしいということ。

問九 エ

【三】
問一 a りようそく
b いうよう
問二 A エ
B オ

問三 足も立たない様子なので

問四 董永
問五 織姫

問六 イ
問七 ウ

受験番号